

〔エピソードⅡ〕カラダの中の“水”と病気

矢吹 拓

国立病院機構 栃木医療センター

紀元前5世紀頃、ギリシャの医聖ヒポクラテスは、体を構成する基本的な要素として「四体液説」を唱えた。血液、粘液、黄胆汁、黒胆汁の4つである。これらのバランスが健康を司り、その乱れが病を引き起こすという理論は、その後、近代医学に至るまで長く影響を与えた。ヒポクラテスも「カラダの中の水」に大いに着目していたのである。

ヒトの体重の約60%は水分であり、その多くが細胞内液と細胞外液に分かれて分布している。体液は電解質や蛋白質、ホルモンなどを運びながら全身を循環し、物理的な支持と化学的な均衡を保っている。通常は均衡が保たれている水分のバランスが一度崩れると、さまざまな病態が姿を現す。人体において水は、単なる「液体」ではない——それは、生を支える場であり、病を媒介する存在でもある。本特集『ウォーター・ウォーズ』はエピソードⅠ『ストーン・ウォーズ』に続くシリーズ第2弾として、「カラダの中の水と病気」にスポットをあてたものである。

多くの臨床医にとって、「カラダの中の水」との付き合いは日常そのものである。心不全による肺水腫、肝硬変による腹水、四肢末梢の浮腫、関節内の液体貯留…。それらは、通常はカラダにとって非常に重要な役割を果たす一方で、時には“あるべき場所”を離れて異物化している瞬間のようでもある。流動的な役割を果たしているのは非常に興味深い。日常臨床において、あれだけ溜まっていた水があっという間になくなっていくのを目の当たりにすることも少なくないだろう。



「たゆたえど沈まず」

Fluctuat nec mergitur

この言葉は16世紀頃からフランスパリの市紋章に書かれているラテン語である。セヌ川の中州にシテ島という島があり、この島は川の氾濫など何度でも沈みかけてきたが、それでも島として何世紀にもわたって残り続け今日に至っている。川を行き交う船人たちはこの島の様子を見ながら、いつしか合言葉のように「たゆたえど沈まず」と唱えるようになったという。この言葉には、何度でも流れに逆らわず、激流に身を委ねて、しかし、決して沈まず、やがて立ち上がるという意味が込められている。

カラダの中の水分も、私たちの長い人生の中で時には溺れたり、時には干からびたりと、さまざまな場面を経験する。でも生きている限りそのバランスを絶妙にとりながらカラダを維持してくれるのである。まさにたゆたえど沈まず。本特集は、その見えざる“水の営み、そして水との戦い”を可視化しようという試みである。

本特集では、水の動態を理解するための総論から始まり、各臓器における水分貯留とその病態を横断的に解説する。また、稀少疾患や薬剤性、水媒性感染症、水環境に関連した特殊な病態にまで焦点を広げ、「水と人体」の関係を可能な限り立体的に描くことを目指した。各領域のエキスパートの皆様に素晴らしい原稿を賜り、心から感謝したい。この特集が多くの皆様の手に届き、水との対決に少しでも役立つことを期待している。

P.S. 次回完結編、エピソードⅢに乞うご期待！

